

『ワイルドフェル・ホール』——ヘレンの人生を考える

The Tenant of Wildfell Hall —— A Consideration of Helen's Life

松原典子

Noriko Matsubara

要 約

アン・ブロンテの『ワイルドフェル・ホールの住人』は3つの場面から構成されている。ヒロインのヘレンの人生は2通の書簡と日記によって描かれ、書簡はギルバート・マーカム、日記はヘレンが語る一人称で展開される。時系列では書簡の書きだしの挨拶以後、日記、最初の書簡、最後の書簡の順になる。

アンのヴィクトリア朝社会に対する挑戦が、日記と最後の書簡から理解できる。日記にはアンの女性観がヘレンを通して描出され、女性の権利と自立への抵抗は、ハンティンドン夫人とグレアム夫人に託される。書簡ではアンの理想とする結婚と自立、そして階級が語られる。未婚のヘレン・妻としてのハンティンドン夫人・ワイルドフェルでのグレアム夫人は同一人物。つまり時代とともにヘレンの呼称は変化する。

作品の背景や人物描写に植物が描出される。それらがどのような効果を齎しているか、つまりアンの女性観や階級に対する抵抗と発信、そして植物がヒロインの人生の表象であることを検証する。

キーワード：家庭の天使・女性の自立・結婚・階級・表象

I. はじめに

『ワイルドフェル・ホールの住人』(*The Tenant of Wildfell Hall* 1848)¹(以後、『ワイルドフェル』と示す)は、アン・ブロンテ (Anne Brontë, 1820-49) の長編小説で、主人公ヘレン (Helen) の娘時代から再婚までを描いている。アンの社会経験は約5年のガヴァネス (governess)、つまり住み込みの家庭教師のみで、『ワイルドフェル』に描かれる上流社会はガヴァネス時代に見聞きしたものである。アンはケンブリッジ大学出身でイギリス国教会牧師の父の赴任先であるイングランド北部ヨークシャーのハワース (Haworth) で育った。階級社会の中、ブロンテ家と村人との間の交流はほとんどなかった。

『ワイルドフェル』はヴィクトリア朝社会がヘレンの人生を通して語られる。同時にアンの声である。つまり、男性社会に組み込まれたヴィクトリア朝の女性の自立、経済的な妻・母の地位と立

場と権利を描いた挑戦的作品である。

本研究ノートでは、ヘレンの恋愛、結婚、再婚と、それらの背景に描かれる植物や庭園も考察する。

II. 『ワイルドフェル・ホールの住人』の構成

『ワイルドフェル』は3つの場面から成り立っている。

まず第1章から15章。ここではギルバート・マーカム (Gilbert Markham, 以後、ギルバートと示す) とヘレンの出会いと彼女への恋心が、ハルフォード宛 (To J. HALFORD, ESQ) の書簡に描かれる。次の第16章から44章は、親友フレデリック・ロレンス (Frederick Lawrence) とヘレンの関係を誤解したギルバートに、彼女が手渡した日記により物語が進む。最後が第45章から53章で、ヘレンとの結婚までの経緯をギルバートが書簡に記している。物語は書簡、日記、書簡と進み、時系列では、日記、最初の書簡、最

後の書簡の順になる。書簡はギルバート、日記はヘレンの語り、つまり一人称で展開する。

ヒロインのヘレンの人生を左右する人物は、日記に登場する夫のアーサー・ハンティンドン (Arthur Huntingdon) である。日記が作品の半分以上を占めるが、物語を牽引するのは自作農²に属すギルバートである。彼は自身を次のように記している。

6月末の…朝…干し草原に働き手を総動員して僕もシャツ一枚に軽い日よけの麦藁帽子…使用人や雇人の大勢の列の先頭に立ち… (8, 89)

... the close of June. I had gathered all hands together into the hayfield, and was working away myself, in the midst of them, in my shirtsleeves, with a light, shady straw hat on my head ... at the head of a goodly file of servants and hirelings ... (8, 643)

このギルバートの姿は『ワイルドフェル』のヒロインのヘレンの人生を考えるうえで重要な部分になる。

Ⅲ. ヘレンの人生

3-1. ワイルドフェル・ホール

ギルバートや村人がヘレンを気にし始めた頃、彼女はグレアム夫人 (Mrs. Graham) と名乗りワイルドフェルに住んでいた。このワイルドフェルは、ギルバートの生活するリンデン・カー (Linden-Car) から約2マイルの丘の頂上に建つエリザベス朝の老朽化した大邸宅 (a superannuated mansion of the Elizabethan era) である。

このあたりではとりわけ荒涼とした一番の高台、ワイルドフェルの険しい上り坂…樹木は落葉樹や欧州アカマツ³、また孤立して生えるリンボク…コケモモやヒース—荒れ

野の遺物… (2, 21-22)

... proceeded to mount the steep acclivity of Wildfell ... larches and Scotch fir-trees, or isolated blackthorns ... bilberry plants and heather—relics of more savage wildness ... (2, 610-611)

このワイルドフェルの所有者のロレンスは、父の死後リンデン・カーで生活し、控えめな性格から知り合いも少なく、ギルバートだけが気の置けない友人である。しかしギルバートがロレンスをどの程度理解していたかは明確でない。リンデン・カーの住民たちは、ワイルドフェルに幼い息子と隠遁者のように生きるグレアム夫人に好意的ではない。教会でもポツンと親子で隅に座り、そそくさと帰路につき、村人との接触を避けているためである。しかし、この不思議な存在である彼女にギルバートは関心を持ち始める。当然、家族や周囲は彼に忠告・反対するが、彼にとってはより気になる存在になっていく。

ギルバートとグレアム夫人の関係は、人里離れた荒涼とした地に建つワイルドフェルを妹たちと訪れるところから始まる。彼の「どうしてこんなところで耐えられるのかな—」(But then how can you beat such a situation—) (7, 76, 44) は、ワイルドフェルがいかに隔絶された世界であるかを想像させてくれる。同時に、この背景はグレアム夫人の人生の導入部である。この世界にギルバートの好奇心は揺れ動き、夫人に近づいていくのである。偶然、彼が夫人の息子のアーサー (Arthur) を救ったことで言葉を交わすようになり、その後、お互いギルバートとヘレンと呼び合う関係へと進展する。ギルバートが足しげく通うワイルドフェルが気になり、兄に付いて来たロウズに美しく開きかけた蕾をヘレンは一本手折る。すると、ギルバートは次のように語る。

『僕のものにしてはいけませんか』と聞いてみました…彼女はしばらくその手を僕に

預けてくれました。僕は彼女の目の中に恍惚とした光が走り、顔には喜びの興奮が燃えるのを見ました—勝利のときがやってきた、と僕は思いました。(10, 118)

“May I not keep it myself?” She let me hold it for a moment, and I saw a flash of ecstatic brilliance in her eye, a glow of glad excitement on face—I thought my hour of victory was come ... (10, 657)

この時点で、ギルバートとヘレンは互いに友情以上の感情を持ったようだ。しかし、ヘレンとロレンスの親しさ、彼に懐くアーサーの様子を見たギルバートは、嫉妬に駆られロレンスを落馬させてしまう。これをきっかけとして、ヘレンはワイルドフェルに至った経緯を記した日記をギルバートに手渡す。この行為からヘレンにとってギルバートが特別な存在になったことがわかる。

3-2. 日記

日記にはヘレンの娘時代からワイルドフェルに隠遁するまでの人生が描かれる。日記は1821年6月1日、ヘレンがロンドンでの社交シーズンを終え、スタニングリー (Staningly) に帰宅したところから始まる。彼女はスタニングリーで伯父夫婦と住んでいるが、なぜ両親でなく伯父夫婦なのかという理由は説明されていない。ヘレンはここでの生活を「田舎の生活の疎ましき」(my new-sprung distaste for country life.) (16, 176, 684) と、刺激のなさを嘆いている。唯一、彼女にとっては「絵を描くことが一番私の慰め」(My drawing suits me best) (*ibid.* 684) である。

ところで、上流階級の恒例の行事は社交界での交流である。田舎からロンドンに出発する前、社交界デビューの18歳のヘレンに伯母はあれこれ忠告する。当時のイギリス女性は「家庭の天使」(the angel of house)⁴ であるべきだと教育されていた。「家庭の天使」とは貞淑であること、無分別にならないこと、慎重であること、つまり油

断しない。情に溺れない。節操が一番ということである。これに対してヘレンは、「結婚する人を愛することはもちろんであるけれど、敬い尊ぶことができなければ愛することはできません。」(I ought to be able to respect and honour the man I marry, as well as love him) (16, 180, 686) と答える。

ロンドンでの社交時期の終了後、アーサー・ハンティンドン (Arthur Huntingdon) がスタニングリーを訪れるようになった。彼以外にも複数の男性がヘレンとの結婚を伯父夫婦に打診するが、ヘレンは40歳前後であったり、好みや感じかたが異なる、あるいは偏屈・狭量など嫌悪感を抱くという理由で断り続け、最終的にアーサーを選ぶ。楽観的で楽しく、陽気で深く考えない性分のアーサーに対し、ヘレン自身の分別と節操が彼の人生にとって役立つと考えたのだ。伯母の「無思慮で放蕩者」(thoughtless profligate) (17, 205, 697) というアーサー評にもかかわらず、「罪を憎んだとしても罪人を愛します。あの方を救うためには全力を尽くします」(... if I hate the sins I love the sinner, and would do much for his salvation, ...) (17, 207, 698) と、自分を過信する。結果的にこの過信がヘレンの逃亡生活、つまりワイルドフェルでの生活へと繋がる。

上述した「家庭の天使」は、18世紀末から19世紀にかけてのイギリス女性の代名詞で、中・上流階級に属する者が受けるべき教育である。基本的に、女子は住み込みのガヴァネス (governess) によって教育されていたが、女子寄宿学校で団体生活を含め教養を身に付けることもできた。ヘレンが家庭で教育されたのか、寄宿学校の経験があるかは語られていないが、アンは両方で教育を受けている。家庭の天使たちの教養の一つに絵画がある。絵画はヘレンのワイルドフェル時代の生活の糧になる。アンも多くの作品を残しているが、多くは海の風景である。海から離れたハウスで育ったアンは、イングランド北東部の海辺の保養地スカーバラ (Scarborough) を特に愛し、スカーバラ滞在中に亡くなりこの地に葬られている。

ところでヘレンの描いた何枚かの中からアーサーが取り上げた一枚は、

明るい空の色、暖色の鮮やかな光と濃く長い影で、日の指す朝の感じを出すように配慮した。…あえて草や木の葉は鮮やかな緑にした。森の中に開けた空間…辺りに広がる新緑を引き立たせていた。…伸びた大枝の一部が見えて、その葉は黄金色にきらめく緑であった—秋に熟れ切った黄金色ではなく、陽光とまだ広がり切れない、未成熟の葉の醸し出す黄金色なのだ。…大枝には、睦まじいキジバトのつがい止まり、その柔らかくすんだ羽毛の色は、また別の景色との対象になっていた。その下には、ヒナギクの散在する芝生に少女が仰ぎ見て膝をついていた。少女の金髪は肩にかかり、両手は握りしめられ、くちびるは開かれ、そしてその目は一心に、ふわふわとした羽毛につつまれて愛し合うものたちを、楽しそうに、しかも熱っぽく見つめていた— (18, 219-220)

By the bright azure of the sky, and by the warm and brilliant lights and deep long shadows, I had endeavoured to convey the idea of a sunny morning. I had ventured to give more of the bright verdure of spring or early summer to the grass and foliage The scene represented was an open glade in a wood ... the prevailing freshness of the rest ... was of a brilliant golden green---not golden from autumnal mellowness, but from the sunshine and the very immaturity of the scarce expanded leaves. Upon this bough...were seated an amorous pair of turtle doves, whose soft sad-coloured plumage afforded a contrast of another nature; and beneath it a

young girl was kneeling...with head thrown back and masses of fair hair falling on her shoulders, her hands clasped, lips parted, and eyes intently gazing upward in pleased yet earnest contemplation of those feathered lovers---too deeply absorbed in each other to notice her. (18, 704)

アーサーはこの作品が自分への思いを投影したものだとして勝手に理解し、ヘレンとの結婚を急ぐ。

しかし、ヘレンの結婚生活は大海原に船出した小舟のようだった。大きな期待と自分を過信したことが苦難の始まりとなる。「彼を愛すれば愛するほど、その欠点は私を悩ます。あんなにも信頼していた彼の本当の心は、私が考えていたほどに思いやりも寛大さもないのではないだろうか。」 (... Arthur's faults; and the more I love him the more they trouble me. His very heart, that I trusted so, is I fear less warm and generous than I thought it.) (22, 257, 722), さらに「グラスデイル・マナーのハンティンドン夫人…最初に今ほど十分に彼のことを知っていたら、おそらく彼を愛してはいなかっただろう…私が勝手に盲目になっていたのだった。」 (I am married now, and settled down as Mrs. Huntingdon of Grassdale Manor ... Arthur is not that I thought him at first, and if I had known him in the beginning as thoroughly as I do now, I probably never should have loved him I was wilfully blind) (23, 280, 733) と反省の弁である。しかし「家庭の天使」の時代である。女性が男性の上位者になることはありえない、という常識がヘレンには欠けていた。夫の愛情を妻が測ることは不可能な時代である。夫は妻を自由にコントロールできる、と考えるアーサーこそヴィクトリア時代の夫である。妻は飾り物なのだ。しかし、飾り物の妻ヘレンにアーサーの愛がなかった、と一概に言うことはできない。ただ、アーサーはヘレンと異なり知的で

はない。彼の興味は社交と女である。時代の常識的夫のアーサーとヘレンの夫婦像は相反している。

とはいえ、3月25日の日記の記述には驚愕させられる。アーサーはヘレンにかつての情事 (his former amours) を聞かせ反応を見、彼女の「反感や憤り」 (my horror and indignation) (24, 289, 737) に笑い転げる。さらに、4月4日には別の女性との情事 (the whole story of his intrigue with Lady F—) (24, 290, 737) を無理やり聞かせ、反駁するヘレンに、「夫が老いぼれだからだ」 (a dotting old husband, whom it was impossible to love) (24, 291, 738) と情婦を庇う。この頃ようやく、ヘレンは自分の結婚に後悔し始め、同時に自立を目指す。「私の心は彼に隷属するものではないことを、そしてその気になれば、私は彼なしで生きていけることを彼に示そうと決意した。」 (I was determined to show him that my heart was not his slave, and I could live without him if I chose.) (24, 292, 738), また「できることなら美德への恥を知らせよう。」 (I will shame him into virtue if I can.) (25, 315, 749) と考える。一方で、「彼が地主の役を務め、農場の仕事でもしてくれるなら—」 (If he would play the country gentleman, and attend to the farm—) (25, 316, 749) と、結婚生活の破たんを心底考えていないのではないかとも思える。頭と体を使う仕事なら、アーサーが人間的に立ち直れるのではないかと考えるヘレンは、この時点になっても自分が夫を主導できると確信している。『ワイルドフェル』の最終場面で、このヘレンの意識はギルバートを選び開花する。しかし、社交界で生きることが階級差に繋がるという事実を、ヘレンがいかに捉えていたかは疑問である。自己愛と、自分主導で生きることが念頭に置いていたとすると、従順な女性を育てる「家庭の天使」教育はヘレンに効をなさなかったことになる。

しかし、この事実こそがアンのイギリス社会に対する宣言である。アンは片田舎のハウースの牧

師館で育ち、3人姉妹の中で一番最初にガヴァネスの職業を得た。雇い主の新興中・上流階級の生の姿を見つつ、女性の自立に立ち向かった。イギリス国教会の牧師は、教養はあるが経済的には裕福とはいえず、階級的にも狭間にある。結婚が人生の最終目標であっても、たやすく相手を見つけることはできない。家庭の天使教育を受けたとしても、「老嬢」 (old maids) になる可能性は高かった。父のもとで育ち、夫のもとで庇護される人生。あるいは兄弟のもとで庇護されるか厄介者として終える人生。それを拒めば「老嬢」としてひっそり暮らすほかなかった。このような常識の中で、アンはヘレンに家庭の天使を逸脱する夫支配を課したのである。

ところで、ヘレンが結婚生活から逃避するきっかけはアーサーが語るレディ・ロウバラ (Lady Lowborough), つまりアナベラ (Anabella) との情事である。ロウバラ卿夫妻はヘレン宅に滞在しているが、アナベラはアーサーと情事を重ねる。ロウバラ卿は親友と妻の関係を想像だにしていけない。アーサーはヘレンに見せつけることが愉快なのである。アーサーにとって、情事の相手と妻の存在は無関係である。妻は家庭の天使である。結婚後は何事であろうと夫に従うもので、夫が生かす (拙者傍点) 存在だとアーサーは考えている。しかも二人の関係は同宿している夫の仲間のハーグレイヴ氏 (Mr. Hargrave) やグリムズビー (Grimsby) も公認である。ロウバラ卿とヘレンだけが蚊帳の外である。夫婦対等、さらに妻は家庭経営の主人公という認識を持っているヘレンは、幼いアーサーのために「子どもと、私の財産の残りを下さって、出て行かせていただけませんか？」 (Will you let me take our child and what remains of my fortune, and go?) (33, 435, 805) と夫に懇願する。

すでにアーサーは息子に「ママなんか地獄に落ちやがれ」 (Mamma be damned) (39, 517, 844) と雑言をはき真似させる。息子が墜落しないように、贅沢と豊かさより落ち延びても貧しい母子の生活を選ぶヘレンである。彼女は「わ

たしは奴隷だ、囚われ人だ」(I am a slave—a prisoner) (40, 524, 847), つまり夫に手元の金を一切取り上げられた存在と認めているが、次のステップに進むことができないでいる。ただ、社交シーズンが到来しアーサーがロンドンに向かうと、ヘレンは息子の幼い心の雑草を根こそぎ退治し、子どもらしさを取り戻すことに全力を尽くす。アーサーはわずか3歳くらいの息子アーサーにアルコールを覚えさせていた。ヘレンはアルコールの嘔吐感を体験させ、飲酒の根絶に成功し、本来の幼いアーサーに戻す。息子を取り戻したヘレンにとって、夫不在時こそ逃避計画開始である。もちろん、当時の法規制では婚姻と同時に女性の法的存在は停止する。あるいは夫に統合される。ヘレンはアーサーの庇護を受け、ヘレン自身の財産や息子アーサーの養育権・親権は剥奪され、離婚の権利もすべて夫に握られていた⁵。それにもかかわらず、ヘレンが逃避計画を立て実行に移すことができたのは、「家庭の天使」としての教養の一つ、絵を描くことで画家として生きる自信があったからである。ヘレンの夫婦生活はここ第44章終わっている。

ギルバートの最初の書簡に比べ、ヘレンの日記には自然や植物の描写が極端に少ない。書簡と日記では表現方法が異なるからであろうが、アーサーの情事がアンの技量を欠如させたのではないかとも思える。そうであるなら、その元凶は兄ブランウェル (Branwell) と家庭教師先のロビンソン夫人 (Mrs. Robinson) の情事に起因する。ブランウェルはブロンテ家の厄介者で、薬や酒におぼれ定職に就くこともままならず、アンがガヴァネスとして働くロビンソン家のチューターとして雇われることになった。家族もアンの監視下に置けば安心と考えたようだ。しかし、ブランウェルはロビンソン夫人とただならぬ関係になったとされ、この二人の関係がアーサーとアナベラに投影されたようだ。ブランウェルを死に追いやったロビンソン夫人こそアナベラということだ。アナベラをヘレンの人生の破壊者とする事で、ロビンソン夫人がブランウェルの人生を破壊

に誘う悪女とするアンの声が『ワイルドフェル』に響き渡っている。

3-3. 純愛

ギルバートは、グレアム夫人として生きてきたヘレンの秘密を知ったことでより親密さを深めていく。ヘレンの逃避は兄ロレンスの助力で成功し、荒野のワイルドフェルで慎ましく絵画を売ることで成り立っている。売り上げはロレンスの助力の賜物であるが、二人は兄と妹でありながら両親の離婚で別々に生活し、ヘレンは伯父夫婦のもとで成長した。初めてギルバートたちの前に登場した時、ヘレンはグレアム夫人と名乗ったが、グレアムとは母の旧姓である。

ところでギルバートとヘレンの関係である。ヘレンは隠遁生活を送りながらも夫のある身。ヘレンの「あなたはわたしを許すことがおできですか？」を「ある背信を意識してのことだろう」(Can you forgive me? It might be deemed a breach of trust) (45, 570, 868) とギルバートは認識する。「許す」・「背信」は、ヘレンとギルバートともに、彼女の生き方と「家庭の天使」像が乖離していると認識しているからである。しかし、ギルバートは夫を捨て、子供を抱え、兄に頼る生活を送るヘレンに、社会が抱く偏見を抱いてはいない。二人は結婚と女性の自立に時代を超えた共通認識を持っているが、「許すことができるか」・「ある背信」には、社会通念での破廉恥といえる意識がヘレンの心底に罪悪感として存在しているようでもある。家庭の天使像を逸脱したヘレンを、純粹・純潔 (拙者傍点) なギルバートが受け入れることができるのか葛藤している状況でもある。結果、「肉体を離れた魂か、感情の左右されない友人」(such as disembodied souls or unimpassioned friends) (45, 578, 872) であり続けたいと願うヘレンは、自分の選んだ結婚とその結末が、ギルバートに対して負の遺産を押し付けることになるのではという自己嫌悪に陥っている。

さて、日記は二人の愛の原点ではあるが、即座に結婚に繋がるわけではない。ヘレンが看病のた

めアーサーの元へ駆けつけるからである。逃避という形でアーサーと決別し、兄の庇護を受け新たな人生を選択したヘレンがアーサーの元に戻ることは女性の権利と自立と逆方向ではないのか疑問である。

妹と友人の関係を見守ってきたロレンスは、「今それぞれが相手について、自分たちの値打ち以上高い意見を持っていると思うのだが。そして妹の感情は、生来が君と同じように非常に思いつめるものだし、いっそう誠実なものだと思っている。しかし彼女は良識もあり、とくにこの場合は感情を抑える精神力を持っている」(… each has a more exalted opinion of the other than, I fear, he or she deserves; and my sister's feelings are naturally full as keen as yours, and I believe more constant; but she has the good sense and fortitude to strive against them in this particular ….) (46, 594, 880) と分析する。ロレンスは階級を越えた親友ギルバート、さらに生き別れ状態で成長した妹ヘレンの人間性を的確に判断している。ロレンスはグラスデイル・マナー (Grassdale Manor) に向かうヘレンを「彼女自身の義務感」(her own sense of duty) (47, 607, 886) と理解している。

ところで、アンの姉シャーロット (Charlotte) の『ジェイン・エア』(*Jane Eyre*) の中で、ヒロインのジェイン (Jane) がロチェスター (Rochester) との結婚当日、祭壇の前から逃げたのはジェインがガヴァネスとして働くロチェスター家の屋根裏に彼の妻が閉じ込められている事実を知ったからである。重婚の否定である。ヘレンの行動も同様である。アンはヘレンにギルバートの愛を受け入れることは不可能だと断じたのだ。隠遁生活を送りながらも夫のある身の重婚を回避させたのである。

看病されるアーサーは「アリス、戻ってきたんだね？」(Is it you, Alice, come again?) (47, 608, 887) と意識朦朧のなか愛人の名を呼ぶ。しかし、ヘレンだとわかると「悔恨とか混乱とかの体でばくをやっつけることができる」(… if you could

overwhelm me with remorse and confusion of face, now's the time.) (47, 612, 888) と、悪態の限りであるがついに最期が来た。ヘレンは「懺悔と寛容が臨終の彼に訪れたであろう」(… penitence and pardon might have reached him at the last ….) (49, 646, 904) と信じることでハンティンドン夫人から解放される。ヘレンの屈辱と悲惨な結婚生活は、彼女の忍耐と克己、そして神の加護を信じることで魂の救済を受けることができたのである。

一方、ギルバートはヘレンとの新しい人生を夢見ながら、ロレンスの胸の内を次のように想像する。

おそらく彼は自分の妹と結ばれるには、僕はあまりにも貧しく—あまりにも低い身分の生まれだと考えるのでしょう。当然ながらグラスデイル・マナーの女主人であるハンティンドン夫人とワイルドフェル・ホルの住人であり、画家でもあるグレアム夫人との間には、身分と境遇の大きな隔たりがありました。Perhaps he would think me too poor—too lowly born, to match with his sister? Doubtless there was a side distinction between the rank and circumstances of Mrs. Huntingdon, the lady of Grassdale Manor, and those of Mrs. Graham the artist, the tenant of Wildfell Hall. (50, 650, 905)

ロレンスは階級差に悶々とするギルバートに、ヘレンからの手紙を見せることも近況を伝えることもしない。2月に伯父が亡くなった頃、偶然、ギルバートはヘレンが結婚するという情報を得てグラスデイルに直行するが、誤情報で主人公はロレンスであった。ヘレンの居場所がグラスデイル・マナーと直感し向かうギルバートであるが、彼女は大半をスタニングリーで過ごし、グラスデイルには管理上必要な時にしか来ないと門番小屋 (the porter's lodge) で聞き、スタニングリーへ向かう。そこで彼が目にした光景は、密集した

生垣，深く，形よく掘られた掘割，そしてある所では境界線となり，またある所では囲い地の真ん中に木立として生長している樹木は，人目を引くところでした。(52, 683)

... conspicuous for their compact hedgerows, deep, well-cut ditches, and fine timber-trees, growing sometimes on the borders, sometimes in the midst of the enclosure ... (52, 921)

さらに馬車の二人の相客から，この土地が「先代のマックスウェルの地所」(It's old Maxwell's)で「全部を姪御に残した…一坪残らず一邸宅も何もかも—この世の財産すべてを。それに本人の姪じゃない。…あの財産のほとんどは彼女（奥方）が持ってきたもの…」(… has left it all to his niece Every rood of it,—and the mansion-house and all, —every hatom of his worldly goods! ... And she wasn't his own niece neither ... she'd brought most of the property (52, 683-684, 921) と聞く。彼らは指さしながら，「あれが館ですわ—広々とした庭園ざんしょ—それにあの森全体—あそこは樹木も豊かで獲物も多い。」(that's the hall—grand park—and all them woods—plenty of timber there, and lots of game.) (52, 684, 922) とギルバートに語る。ギルバートが出した答えは「では，さようなら，いとしいヘレン，永久に！永久にさようなら！」(Adieu then, dear Helen, for ever! For ever adieu!) (52, 86, 923). 彼の脳裏には階級の二文字が浮かんだはずである。振り向きもせず帰路に着くと，ちょうど懐かしい声が馬車から聞こえる。ヘレンは「マーカムさんがいる。」(Mamma, mamma, here's, Mr. Markham!) (53, 688, 923) と叫ぶアーサーの声を聞くと，瞬間的に伯母に「アーサーのお友達の！」(Arthur's friend!) (*ibid.*) と言いながら窓から手を差し出す。ギルバートは一瞬ながらも熱烈に握るが，後悔したように引っ込める。いくつもの門 (gates) を過ぎて庭園まで案内するアーサー。門の数から屋敷の

広さが想像できる。ヘレンは伯母に「兄の親しいお友達ですし，私たちの親しい知り合いです。そして息子を大変にかわいがって下さいました」(This man is my brother's close friend, and was my own intimate acquaintance, and professed a great attachment to my boy.) (53, 693, 925) と紹介する。しかし，伯母とアーサーが退室すると，「今まで通り熱烈に情熱はある—変わったのは僕じゃない，境遇なんだ。」(I am not changed, Helen...it is circumstances that are changed.) (53, 695, 926) と吐露する。

あなたの相続権の話聞くまで，この財産があなたのものだとは知らなかったのです。自分の抱いてきた望みが愚かにも一瞬でも長くしがみついているのは気違い沙汰だと。…会わないほうが良いと思ったのです。…会うことはあなたの平和を乱すだけだし，自分の心を狂おしくするだけだと思ったのです。(53, 695)

I did not know that this estate was yours. I saw at once the folly of the hopes I had cherished and the madness of retaining them a moment longer... . I thought it would be better for both that we should not meet. I thought an interview would only disturb your peace and madden me. (53, 926-927)

ギルバートはこの場を立ち去るべきだと決心した。別れを直感したヘレンは青ざめ，すかさずヘレンは雪の中から覗いていた小さな茂み (クリスマス・ローズ) に近づき手折る。

この花には芳香はありません。でもこれはどんな花も絶えることのできない厳しさに耐え抜いてきました。冬の冷たい雨はこの花を育むのに十分でしたし，冬の弱々しい太陽もこの花を温めるのに十分でした。吹きすさぶ風でこの花の色が褪せたり，茎

が折れたりすることはありませんでした。そして身を指すような霜もこの花を枯らすことはありませんでした。ごらんなさい、ギルバート、この花はまだ花びらに冷たい雪がかかっている、精一杯花の命を鮮やかに咲かせています—この花をもらっていただけますか？ (53, 698)

This rose is not so fragrant as a summer flower, but it has stood through hardships none of them could bear: the cold rain of winter has sufficed to nourish it, and its faint sun to warm it; the bleak winds have not blanched it, or broken its stem, and the keen frost has not blighted it. Look, Gilbert, it is still fresh and blooming as a flower can be, with the cold snow even now on its petals. Will you have it? (53, 928)

受け取るべきか迷うギルバートに、「あなたにあげたクリスマス・ローズはわたくしの心の証だったんです。」(The rose I gave you was an emblem of my heart.) (53, 700, 929) と囁く。ギルバートにとってもヘレンは「新たに見出した宝」(my new-found treasure) (53, 701, 929) であるが、本能的に失うのではないかと恐れている。それは伯母の存在、つまり階級である。「結婚はわたくし独りで決めることですが、周囲の人たちに相談すべき」(as my marriage is to please myself alone, I ought to consult my friends about the time of it.) (53, 702, 930) とするヘレンの言葉が、結婚の難しさを示している。この「結婚は自分で決める」宣言はアーサーの時と同様であるが、「周囲に相談」の必要性は階級差が最大要因である。ところが、ここでまたヘレンの自己過信が露呈する。「あなたの忠実さはどこへ行ってしまったんでしょう？」(Where is your fidelity?) (53, 701, 929) とギルバートに投げかける。「忠実」とは、自分がギルバートの上位者

であるということ。階級差があろうとなかろうと、夫の上位者になることは、アンがヘレンに託した男女平等・女性の自立と権利に繋がった宣言でもある。

ヘレンは「伯母の冬のお庭になっている温室をご覧にならないうちにお帰りにってはだめよ。」(But you must not go till you have seen the conservatory, my aunt's winter garden.) (53, 704, 931) とギルバートに忠告する。「温室」は階級の象徴であり、ギルバートの冷静さと自制心で、伯母に認めてもらえるかどうかの踏み絵である。「僕にできる償いは喜んでさせてもらおう。」(I am willing to make any reparation in my power.) (53, 705, 931) と答えるギルバートであるが、この「償い」(拙者傍点)は、階級差を認めもらう代わりに、夫が妻側の下位者でなければならなかったのか、と考えさせられる。

IV. アンが描いた植物と自然

4-1. ワイルドフェル

学名 *Pinus sylvestris* の「欧州アカマツ」は樹齢が150から300年とされ、大胆・引退・不滅という意味を持つ。このことから、「欧州アカマツ」はワイルドフェルが荒廃していながらも歴史ある屋敷の象徴といえる。また、逃避・死別・再婚というヘレンの人生の表象でもある。「欧州アカマツ」の英語名は 'Scots pine' であるが、『ワイルドフェル』では 'Scotch fir' となっている。そのため『ワイルドフェル』の日本語訳には「欧州アカマツ」と「樅の木」の二つの訳がつけられているが、それについては本ノートでは言及しない。

Prunus spinosa の学名の「リンボク」は広角度に枝を伸ばす丈5メートルほどの低木で、厳しさ・悪運・困難という意味を持つ。'Prunus' は西洋李を表すラテン語で、キリストの時代から現代にいたるまで、枝を家に持ち込むことは縁起が悪いとされ、死の予兆ともみなされている。「欧州アカマツ」とともにワイルドフェルに逃避せざるを得なかったヘレンの結婚生活を想起させる。

これら大木の足元には、学名 *Vaccinium vitis-*

idea の50センチほどの「コケモモ」が密集する。栄養分の少ない土壌でも育つ低落葉樹で、欺瞞・裏切りという意味を持つことから、ヘレンの痩せこけた姿や逃避の背景を想像できる。

ワイルドフェルからの遠景は荒野である。荒野といえば「ヒース」(heath・heather)。「ヒース」はブロンテ家が暮らしたヨークシャーの荒野の象徴である。荒野、丘や山に群生し、学名 *Calluna vulgaris* の ‘calluna’ は「洗浄する」・「飾る」という意味のギリシア語 ‘kalluno’ に由来する。「ヒース」の荒野は花の時期が終わると、野焼きされ黒一色の世界に一変するが、この変化も厳しい自然の象徴である。「ヒース」は立ち向かわなければ前進できないヘレンの人生と彼女の強さの表象といえる。

ところで、初めてギルバートがワイルドフェルを訪問したとき、グレアム夫人が屋敷を案内する場面に「桜草」と黄色い「クロッカス」が描写される。学名 *Primula sieboldii* の「桜草」は、語源のラテン語が示す ‘primula (最初の) + rosa’ である。早春に咲くことで歓喜を呼び込むと想像できる一方で、恋人の疑念・不安・心変わり・無垢・青春の象徴であることから、まさしくヘレンの若気の至りである。

金城盛紀は、「彼女の苦難に耐え抜く力や偽善にも社会通念にも立ち向かう生き方はヘレン、ハンティンドン夫人、グレアム夫人そしてギルバートとの人生すべてにおいて自分に忠実であるからこそその葛藤である。夫を操縦しようとする生き方、子どもを守るための道徳と逃避。これら全てその時々愛に生きる桜草そのものである。」と解している。

『ワイルドフェル』で「桜草」の色は明示されていないが、イギリス原産の「桜草」は黄色である。この黄色に共通するのがワイルドフェルに咲く「クロッカス」である。学名 *Crocus* はギリシア語の ‘krokos’ に由来するが、ギリシア神話ではクロッカスは妖精のスミラックスに恋した若者で、情熱を傾けた愛が報われず死んでしまう。クロッカスは男性であるが、性を入れ替えれば

ヘレンのアーサーへの思いと逃避が浮かぶ。「クロッカス」の中でも、燃えるような黄色の花を咲かせる ‘*Crocus crythanthus*’ は「若き日の喜び」を意味するが、これはヘレンがアーサーに恋し結婚する喜びと期待、さらに夢破れた結婚からの逃避人生を象徴している。ちなみに「サフラン」で知られる ‘*Crocus sativus*’ 種も花卉は紫がかっているが、冬の終わりには黄色い雄しべと花冠の底部で輝きを放つオレンジ色がかった柱頭によってより明るい感じになる。ヘレンの人生が暗から明への過渡期であり、その時期がワイルドフェルでの生活ということである。これらから、「桜草」と「クロッカス」は、グレアム夫人時代のヘレンの表象である。

4-2. 結婚の破綻

結婚を破綻に向かわせた人的きっかけは夫の情婦(アナベラ)である。ヘレンは彼女を「見せ掛けの行為さえ見えてくる。それは「イヌバラ」や「サンザシ」を扱うようなもので一目にはすこぶる鮮やかで、触ると外側は柔らかだが、その内側に棘のあることは知っている。」(… preserve me form such cordiality! It is like handling briar-roses and may-blossoms —bright enough to the eye, and outwardly soft now and then you feel them too …)(31, 381, 779) と苦々しく語る。

‘briar-roses’, つまり「イヌバラ」はバラ科の一種のロサ・カニーナ (*Rosa canina*) で、英語名は ‘dog rose’ である。1-5メートルほどの常緑低木だが、高木に絡み付いて樹冠まで伸びることもあり、先端の茎は細かく鋭い棘で覆われる。「イヌバラ」という名称には、「栽培種のバラと比べて無価値」という意味合いが込められているという説や「バラの花は美しいが枝には棘がある」ともいわれる。「イヌバラ」は花も小さく香りも微かだという理由で、軽蔑が込められた不当な表現となったらしく、美しく官能的であっても軽蔑の対象となった。さらに快樂・苦痛という意味を持つことから、アナベラの快樂とヘレン

の苦痛に通じる。イギリス文学史では、バラの花は16世紀後半の詩人エドモンド・スペンサー (Edmund Spenser) の時代から官能美の表象として使われているので、アナベラの官能美がヘレンを逃避へ追いやったことになる。

‘may-blossoms’ と描出される「サンザシ」は、‘haw, hawthorn, wuickthorn, thornapple, May-tree, whitethorn, hawberry’ と紹介される。これらの属名 *Crataegus* は強さを意味するギリシャ語の ‘kratos’ に由来し、一般的に「セイヨウサンザシ」と呼ばれる。‘hawthorn’ は古英語の ‘hagthorn’ または ‘haegthorn’ の語形が変化し、‘white thorn, bread and sheese tree, maybush, maytree’ として知られている。‘hag’ は垣根を、‘thorn’ は棘を意味する。『ワイルドフェル』では ‘may-blossoms’ と書かれ、「サンザシ」と訳されているので5月を連想できる。満足・豊穡・結婚・希望・無私・春の意味は、アナベラとは対極のようなものであるが、地方により多くの迷信があり、一般的には「サンザシ」の木を切り倒すと家や家畜に大きな災難を齎すとされる。ヘレンにとっての疫病神である。現在でも花は家に持ち込まないようだ。さらに不快な香りを放つため、「サンザシ」の木の下に座ることは危険視されている。アナベラがハンティンドン家に災いをもたらす象徴であり、棘であると理解できる。

「イヌバラ」と「サンザシ」は原文と翻訳で一致していないが、この二種類はバラ科に属し、棘があり5月頃に開花する。アーサーに不信を抱く冬の時代のヘレンにとって、これらはまさしく棘でしかない。彼女の最大の願いは、アーサーが夫として父親としての役割と人間性を取り戻すことであるが、そこに棘のアナベラが立ちはだかるのである。

4-3. 逆プロポーズ

日記を読み終わったギルバートは「あなたはわたしを許すことができですか?と僕のくちびるにそのユリのような手を当てたのは、ある背

信を意識してのことだろう」(Can you forgive me? It might be deemed a breach of trust, I thought, to convey that lily hand to my lips.) (op. cit. 868) と胸中を語る。ギルバートの「ユリ」のような(拙者傍点)手は、ヘレンをユリと信じたいという葛藤である。「許すことができるか」は、家庭の天使像を逸脱したヘレンが、純粹・純潔(拙者傍点)なギルバートが受け入れてくれるのかという彼女の内心であり、「ある背信を意識」するのはギルバートの動揺である。つまり、ギルバートもヘレンもともに家庭の天使から完全に開放されていないのである。

ユリは古代からキリスト教圏では純潔・清浄・貞節の象徴であり、学名 *Lilium candidum* は聖母マリアとの関係から「マドンナ・リリー」、英語名 Madonna Lily と呼ばれる。神秘的な象徴で、恥じらい・天界の美・至福・貞節・神聖な結婚・永遠の愛・気品・無実・純潔などの意味を持つのも受胎告知からの影響である。属名の *Lilium* はギリシャ語の ‘leirion’ に関連し、キリスト教の伝説では「ユリ」はイヴがエデンの園を去るとき、後悔の涙から生えたとされる。ギリシャ神話では母性の女神ヘーラー (Hera) の花、イースター (Easter) の花とされ、次世代への花ともいえ、「ユリ」であるヘレンはアーサーの死後、ギルバートとの間で復活する。

一方で、ギルバートは階級差という現実には直面する。すると彼は憔悴し、引き下がってしまう。それに対し、ヘレンは「クリスマス・ローズ」を手自らプロポーズする。知識人の自作農経営者であるギルバートなら、「クリスマス・ローズ」の意味を知っていると思っていたのかもしれない。しかし、彼はその花を投げ捨てる。「私の懸念を鎮めてほしい」という「クリスマス・ローズ」の持つ意味を知らなかったのである。ヘレンの「証」(an emblem of my heart.) (op.cit.929) である「クリスマス・ローズ」をギルバートは慌てて拾う。

「クリスマス・ローズ」の属名 *Helleborus* はギリシャ語の ‘herein’ (殺す) と ‘more’ (食べ物)

に由来する。キンポウゲ科に属す純白な花であるが、中心や根が黒いことで「黒いヘレボルス」と呼ばれることもあった。「クリスマス・ローズ」はローマ帝国時にイングランドに入ってきたようで、生命力が強く、一塊は50年以上もの間変わることなく開花し続けることもあった。常緑多年草で30センチから1メートル以上になり、開花はクリスマス頃に始まり、5月下旬までである。花弁のように見えるのは実は萼片で5枚ある。

ところで、クリスマスはヨーロッパに伝わったキリスト教が北欧の冬至の祭りと一緒になって12月25日になったという説もある。北欧の冬は長く、夜も長く、暗く寒い。冬至から日ごとに明るい時間が延びる。つまり、暗闇が光に向かっていく希望のときである。さらに、キリストの誕生は闇から光が希望を表すときである。そしてクリスマス・ローズは若い乙女の守護聖人である聖女アグネスに捧げられる。一方、‘Christ’s herb, Christmas herb, black hellobore’ と呼ばれたりする。ギリシャ時代には薬効があると信じられ、魔よけの手段として家畜を「クリスマス・ローズ」で祝福したり、家を浄める際にも用いられた。「クリスマス・ローズ」の匂いが悪霊を追い払うと考えられていたのである。さらに、悪霊から居住者を守るため家の近くに植えたりもした。アーサーとの悪霊に取りつかれた暗黒の結婚生活は、「クリスマス・ローズ」とともにギルバートとの新たな光輝く人生を期待させてくれる。

ここで庭園の構造と温室について示す。階級の象徴は邸宅である。いくつもの門を過ぎると広大な敷地が広がり、その先に温室がある。

まず西洋の庭園についてである。プラトン (Plato: 427BC-347BC) やホメロス (Homer: 750BC?) の時代、そしてローマ帝国の時代も庭園は特権階級の象徴であった。プラトンの形相論では、「イデア」＝「本質」、つまり自然を模倣する不規則で非幾何学的庭園となる。しかし、ブリタニア (Britannia) の時代にはローマ帝国の影響から整形庭園 (formal garden) が見られるようになった。この整形庭園様式は現存する多くの庭園

で見られるヨーロッパ大陸を代表する対称形の庭園へと発展し、イギリスでも多く取り入れられる様式となった。しかし、17世紀後半を過ぎたころから自然が崇高 (sublime) なものと認識され知識層に好まれると、18世紀には自然庭園へと変化する傾向が見られ、自然を人工的に開発するようになった。その特徴に「ハーハー」(ha-ha) があげられる。遠目には見えないが、近くに来ると深い溝があることに驚き、「アアア」(ah, ah) と叫ぶことからの派生である。その後、人工的自然の風景式庭園様式 (landscape garden) は大陸にも増え、イタリア、フランスと続いた庭園様式を凌駕するようになった。これは産業革命に成功し大英帝国となったことで、国力が逆転したからである。この不規則で多様な趣を持った風景式庭園が、ハンティンドン邸やマックスウェル邸に見られる庭園である。緩やかにうねりながら芝生が広がり、ところどころに森や木立が現れ、ゲームつまり狩猟ができるほどの生き物が走り、いくつかの建物が見え隠れし、「ハーハー」で牧草地と区別され、柵を作らずに動物たちは邸宅に近づかないのである。ギルバートにはその庭園が、「密集した生垣、深く、形よく掘られた掘割、そしてある所では境界線となり、またある所では囲い地の真ん中に木立として生長している樹木は、人目を引くところでした。」(... conspicuous for their compact hedgerows, deep, well-cut ditches, and fine timber-trees, growing sometimes on the borders, sometimes in the midst of the enclosure ...) (52, 683, 921) と映った。

ところで、『ワイルドフェル』には ‘garden’ より ‘park’ の使用頻度が高い。これも階級差を示している。「ガーデン」は一般的な庭、「パーク」は鬱蒼と茂る森や林が広がり狩猟ができる場所である。ヘレンの人生は「パーク」にありギルバートは「ガーデン」にある。

その「パーク」に温室⁶が存在する。温室は1830年代に温水を循環させる暖房システムが完成したことで、大英帝国支配下の各地域 (インド・メキシコ・南アフリカなど) の植物を育てる環境

が出来上がった。世界遺産であるキュー・ガーデン (Royal Botanic Gardens, Kew) のパームハウス (Palm House) や1851年の第一回万国博覧会の水晶宮 (The Crystal Palace) はガラスと鉄の構造物である。同様な構造を持つ温室は、冬はガラス屋根で保全し、夏は強い日差しを遮ることを可能にした。結果、珍しい植物を先端構造物内で栽培が可能となり、上流階級の庭園の定番となった。この温室に繋がる道でギルバートの語りは終了し、二人が穏やかな人生を過ごしているとハルフォード宛の書簡に記している。ギルバートは上流階級の一員として認められたのであろう。

V. さいごに

本研究ノートではアン・ブロンテの『ワイルドフェル館の住人』を取り上げ、物語の展開と主人公ヘレンを通してアンの世間に対する挑戦、さらに描出される植物から登場人物の心象について検証してきた。ヘレンは伝統的な家庭の天使として社交界で出会ったアーサーと結婚するが、彼の人格を変えろという自己過信と不合理な妻の立場に耐えきれず逃避する。夫からの逃避は全てを失うことを意味した。子供も持参金すべてである。最終的にヘレンは、真逆のギルバートに自ら結婚を申し込む。これは、ヘレンを通してアンのヴィクトリア朝前半の社会に対する挑戦である。

アンは二人の姉、シャーロットの『ジェイン・エア』、エミリー (Emily) の『嵐が丘』 (*Wuthering Heights*) とともに『アグネス・グレイ』 (*Agnes Grey*) を1847年の同時期に出版した。姉たちの作品は賞賛・不評の対象となり、当時のイギリス社会を揺るがすほどの衝撃を与えた。『ジェイン・エア』はジェインとロチェスター、『嵐が丘』はキャサリンとヒースクリフ、この二組の愛と行動に対してである。一方、『アグネス・グレイ』のアグネスとウィルソンの関係は常識的で、世界観が静寂で宗教心にあふれていたことから蚊帳の外であった。そのころすでにアンは『ワイルドフェル』を書き進んでいたと思われる。『ワイルドフェル』は1848年6月に出版されるが、9月にブラ

ウンフェルは失意の中、亡くなる。死に行くブランウンフェルへの鎮魂が『ワイルドフェル』に描かれているのではないだろうか。もちろん、アンは結婚と階級をテーマに社会に挑戦している。女性の権利と自立、そして家庭の天使に繋がる家父長制に挑戦するヘレンの人生を辿ってみた。同時にアンの挑戦に表象として描出される植物や庭園も検証し、それらは構成上必要不可欠な手段であったといえる。

注

1. テクストは *THE BRONTËS—THREE GREAT NOVELS*, Oxford University Press, 1994. とし、日本語訳はブロンテ全集9 アン・ブロンテ『ワイルドフェル・ホールの住人』, 山口広恵訳, みすず書房, 1996年からとする。引用部は、章、日本語訳ページ、英文ページの順に括弧内に示す。
2. ジェントルマン・ファーマーは自作農を指す。OEDでは A country gentleman engaged in farming, usually on his own estate; a farmer who holds a better social position than the generality of his class と示されている。BBC制作の *The Tenant of Wildfell Hall* ではギルバート宅には教区牧師がたびたび訪れ母と懇意な関係が、さらに近隣の人間が集まりにぎやかなサロン風に映像化されている。実際、イギリス18-19世紀の自作農は自身も農業を営むが経営を主とし経済的余裕があった。利益を得るだけでなく、楽しみとして農業に従事する者もいた。ある程度の教養を備えた農業経営者である。さらに『歴史のなかのブロンテ』第33章「農業と工業」で、17世紀のもっとも有名な農学の権威者ジャーヴェスマーカム (Gervase Markham) の名を思い起こさせるギルバート・マーカムの名前は、まさしく農業経営者としての彼の立派な地位を示すとみなされる。同じ階級では代表者すなわち豪農であると、解説されている。
3. 日本語訳のテキスト『ワイルドフェル・ホールの住人』では、'Scotch fir-tree', 'Scotch fir' 共に欧州アカマツと樅の木と訳されており、本研究

ノートでは訳本のまま使用している。

4. 「家庭の天使」(the angel in the house) の初出は Coventry Patmore (1823-96) の *The Angel in the House* という詩のタイトルで、当時は問題視されることは全くなかった。後年、Virginia Woolf (1882-1941) の *The Death of the Mother and Other Essays* や H.V. Routh (1878-1951) の *Money, Morals and Manners as Revealed in Modern Literature* などヴィクトリア朝の作家や歴史家たちが取り上げるようになり時代を象徴する文言となった。A *Widening Sphere—Changing Roles of Victorian Women* (146-162) またこの規範は「感じのいい恋人で善良な夫を得、暖かい家庭を持ち、幸福な家」を持つことが女性の権利ということになる。『紅茶の帝国—世界を征服したアジアの葉』(381)
5. 1850年代まで、女性の地位向上に関する法的改革の動きはなかった。イギリスでは婚姻が成立すると同時に、夫が不動産を含む妻の全財産の所有者になることが規定されていた。これに対抗する運動はアンの死後1870年代ころからである。70, 82, 93年の既婚婦人財産法の制定により、既婚女性も未婚女性と同様に財産所有権が認められることになった。この間の1855年に既婚婦人財産法案が否決され、57年に婚姻訴訟法が通過したことで婚姻および婚姻事件裁判所が設立された。婚姻訴訟法の基準では、妻の姦通罪が裁可されながら、妻からの離婚提訴は夫側に姦通罪の上に虐待または同居拒否の罪状が必要とされ、女性側の不利は明白であった。離婚成立時、子供は自動的に父親側と決まっていた。1856年ようやく、離婚が普通の民事訴訟となった。『19世紀イギリスの小説と社会事情』(119-124)
6. 温室 (greenhouse) には「標本植物温室」(conservatory) や「オレンジ栽培温室」(orangery) などの呼称がある。王政復古後から取り入れられた施設で、中・上流階級で一般的になるのは1820年以降である。『タイムズ』(1820年2月26日) の4ページDコラム“Sales By Action”に、温室付きのヴィラがオークション広告に掲載されている。『ヴィクトリア朝前半の社会と文化』(258)

参考文献

- Addison, Josephine. *The Illustrated Plant Lore*, London: Bloomsbury Publishing, 1997. (樋口康夫・生田省悟訳『花を愉しむ事典』八坂書房, 2007年.)
- Alexander, Christine・Sellars, Jane. *The Art of the Brontës*, Cambridge: Cambridge University Press, 1995.
- 安藤聡『英国庭園を読む——庭をめぐる文学と文化史』彩流社, 2011年.
- Baker, Mike. directed. *The Tenant of Wildfell Hall*, BBC. 1996. (DVD)
- Brontë, Anne. *The Tenant of Wildfell Hall*, London: Thomas Cautley Newby, 1848. (山口弘恵訳『ワイルドフェル・ホールの住人』みすず書房, 1996年.)
- Brown, Julia, Prewitt. *A Reader's Guide to the Nineteenth-Century English Novel*, New York: MacMillan, 1985. (松村昌家訳『19世紀イギリスの小説と社会事情』英宝社, 1987年.)
- Coats, M・Alice. *Flowers and Their Histories*, London: Adam & Charles Black, 1968. (白幡洋三郎・白幡節子訳『花の西洋史事典』八坂書房, 2008年.)
- Ellis, Markman・Coulton, Richard and Mauger, Matthew. *Empire of Tea: The Asian Leaf that Conquered the World*, London: Reaktion Books, 2015. (越朋彦訳『紅茶の帝国—世界を征服したアジアの葉』研究社, 2019年.)
- Guyot, Lucien・Gibassier, Pierre. *Les noms des plantes*, Paris: Presses universitaires de France, 1968. (飯田年穂・瀬倉正克訳『花の名前——ヨーロッパ植物名の語源』八坂書房, 1991年.)
- 川崎寿彦『庭のイングランド』名古屋大学出版会, 2002年.
- 金城盛紀『花のイギリス文学』研究社出版, 1997年.
- Knapp, L. Bettina. *THE BRONTËS: Branwell, Anne, Emily, Charlotte*, New York: The Continuum Publishers Company, 1991.
- 松岡光治編『ヴィクトリア朝前半の社会と文化』溪水社, 2010年.
- 中岡洋・内田能嗣編著『アン・ブロンテ論』開文社出版, 1999年.

中山理『イギリス庭園の文化史——夢の楽園と癒しの庭園』大修館書店, 2003年.

Oxford University Press, *THE BRONTËS—THREE GREAT NOVELS*, 1994.

Scott-James, Anne・Lancaster, Osbert. *The Pleasure Garden: An Illustrated History of British Gardening*, Harmondsworth: Penguin, 1979. (横山正訳『庭の楽しみ』鹿島出版会, 1984年.)

田中英雄編『英米法辞典』東京大学出版会, 1991年.

Thonmälen, Marianne・Wood, Steven. “Agriculture and Industry”. In Thonmälen, Marianne ed. *The Brontës in Context*, Cambridge: Cambridge University Press, 2012. (松井豊次訳「農業と工業」内田能嗣・海老根宏監修『歴史のなかのブロンテ』大阪教育図書, 2015年.)

Vicinus, Martha ed. *A Widening Sphere—Changing Roles of Victorian Women*, Bloomington and London: Indiana University Press, 1977.

Williams, Merryn. *Women in the English Novel 1800-1900*, London: The Macmillan Press, 1977.